

國學院大學學術情報リポジトリ

昔話の談話構造と表現形式にみる地域性：
特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日高, 水穂, Hidaka, Mizuho メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000434

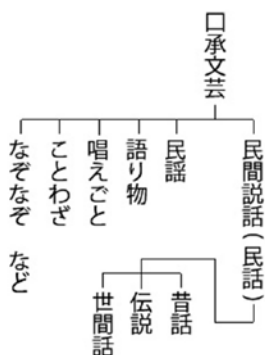
昔話の談話構造と表現形式にみる地域性

日高水穂

1. はじめに

昔話は、伝説、世間話とともに、口承文芸の一種として、民間説話（民話）の下位に位置づけられる。さらに、以下の解説に見られるように、昔話はその「定型性」によって特徴づけられる。

昔話〔folktale〕 民間の人々が生活の中で伝えてきたもので、語り手が聞き手に語るという口頭伝承（口承）を基本的な伝承の様式として持つ、一定の型を備えた散文の物語。昔話という語の由来について柳田国男は、「冒頭に必ずムカシという一句を副えて語る『ハナシ』が昔話であり、この発端の句が昔話という名称の起りでもある」（『日本昔話名彙』）と説いている。発端句や結末句（結句）⁽¹⁾を用いるなどして話の様式性や虚構性を重視する点を特徴とし、伝説や世間話と区別される。



伝説〔legend〕 民間において口承で伝えられてきた散文形式の物語という点で昔話と共通するが、しばしば具体的な事跡や人物と結びついて、歴史的な事実性や、共同体における共有性を重視する点を特徴とする。（後略）

世間話〔gossip〕 民間において口承で伝えられてきた散文形式の物語という点で昔話と共通するが、様式性や虚構性を重視しない点で異なる。また語り手の身近で起こった出来事として自在に語られる点で伝説と区別される。（後略）

（稲田浩二・稲田和子編『日本昔話ハンドブック新版』：240）

昔話の定型性とは、発端句や結末句（結句）を用いること以外にも、特定の文末表現をくり返すことや、以下の指摘にあるように、ストーリー展開にみられる定型性などによっても特徴づけられるものである。

昔話の舞台には、ふつう特定の場所や時の設定はないので、聞き手は場面を自由に移動させ、受けとめている。

最初の二、三の文で、時、所、主な人物が紹介される。つづいて、事件の始まりが簡潔に述べられて、一挙に話に入っていく。出来事と出来事は鎖のようにつながって、物語を進めていき、最後まで行動の連続である。ストーリーは一本の線を時間の流れに沿って進むので、子どもにもよくわかる。話が協道にそれたり、主人公が回想にふけったりすることは滅多にない。風景や心理の描写など、まずないといってよい。

(稲田浩二・稲田和子編『日本昔話ハンドブック新版』: 208-209)

こうしたストーリー展開の定型性を、「言葉を使って他者に語り伝える」という談話的な側面からみると、それは昔話を語る談話構造の定型性の問題として捉え直すことができる。

昔話を以上のような、形式句や文末表現、談話構造の定型性によって特徴づけられるものと捉えたとき、各地の方言で語られる昔話は、どのような談話構造をもち、どのような表現形式が定型化しているのか。以下では、各地で収録された昔話資料の比較分析を行い、昔話の談話構造と表現形式の地域性について考察する。

2. 資料について

昔話の談話構造と表現形式を地域間で比較するにあたり、昔話資料として「方言ももたろう」および「読みがたり各県のむかし話」シリーズを用いる。

(1) 「方言ももたろう」

「方言ももたろう」とは、1989-1992年度科学研究費補助金重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」（代表：杉藤美代子）によって、全国約100地点で収録された昔話「桃太郎」の冒頭部分の音声データである。これにもとづく既刊の資料のうち、以下の (a) (b) を総合した71地点分のデータを分析する。(a) には、監修者による文字化資料が付されているため、これを使用した。(b) は音声データのための資料であるため、筆者が聞き取り、文字化資料を作成した。

(a) 佐藤亮一監修 (2007) 『ポブラディア情報館 方言』ポブラ社

(b) 杉藤美代子監修・著『CD-ROM方言ももたろう』富士通BSC

(2) 「読みがたり各県のむかし話」シリーズ

「読みがたり各県のむかし話」シリーズ（以下「読みがたりむかし話」）は、日本標準から1973～1978年に刊行された「各県のむかし話」シリーズの改訂版として、2004～2006年に刊行された昔話集（各県1巻・全47巻）である。各県の国語教育関係者等によって、県内各地から採集・再話された昔話が収録されている。「ふるさとのことばを味わう」ことを編集方針とし、各巻とも冒頭にその地域の方言についての解説があり、本文の大部分が方言で記述されている。

他社から刊行された昔話シリーズの多くは、昔話の採集量の多い地域や話者に巻構成が片寄る傾向があり、必ずしも全国の方言をまんべんなく俯瞰することには適していない面があるが、「読みがたりむかし話」は、都道府県別に各巻とも同程度の分量（40～70話、60,000～80,000字程度）が収録されており、各巻に携わる話者・再話者・編者の数が多く、地域内での採話地のバランスが考慮されている点で、全国の方言を俯瞰的に対照するのに適した資料であると言える。

3. 昔話の談話構造

昔話の談話構造とそこに現れる表現形式について分析した先行研究に、友定（1988）がある。友定（1988）では、昔話の構造を「冒頭部」「事件展開部」「結末部」に分け、各部に現れる定型的な表現を分析している。

「冒頭部」には、発端句、発端句につづく部分（空間設定、人物設定の叙述部分）、状況説明部が含まれる。「事件展開部」は、内容的には「登場人物たちの行為の継起的配列」によって展開し、形式的には「対話の形式で展開し、地の文は、状況の説明とか補足的内容」が述べられる。「結末部」は、「道徳的・教訓的意味をもった言葉」や「由来、形態などを説明するもの」、「事件の結末を述べるもの」が伝聞の形式を伴って現れ、定型的な結末句で閉じられる。

典型的な昔話は、ある登場者に生じた出来事を叙述する形をとる。この「ある登場者に生じた出来事の叙述」部分を、ここでは、昔話談話の〈主要部〉と呼ぶ。昔話談話の〈主要部〉は、登場者および登場者をとりまく状況を説明する〈導入〉から、登場者に生じた出来事の顛末を描く〈本題〉へと展開する。〈本題〉は、登場者の行為の連続として〈展開〉し、〈結末〉に至る。

昔話の「話」の叙述は〈主要部〉で尽くされているが、昔話の語りを話し手と聞き手の間に生じる「談話」としてとらえる場合、〈主要部〉の前後には、〈開始部〉と〈終了部〉の叙述を見出すことができる。〈開始部〉では、語りの場を「話」の世界に引き込むためのメタ的な叙述が行われ、〈終了部〉では、語りの場を現実世界に引き戻すためのメタ的な叙述が行われる。また、地域によっては、〈開

始部)の定型的な発端句、〈終了部〉の定型的な結末句をもつ場合もある。

表 1 昔話談話の基本構造

構造	内容	
開始部	メタ叙述／発端句	
主要部	導入（登場者および登場者をとりまく状況説明）	
	本題	展開1 展開2 ：
		結末
終了部	メタ叙述／結末句	

談話構造を〈開始部〉・〈主要部〉・〈終了部〉の三段階でとらえるのは、電話会話を分析したポリー・ザトラウスキー (1991) を参考にしたものである。電話会話の〈開始部〉とは「もしもし」のような呼びかけや名乗り、相手確認が行われる部分、〈終了部〉とは別れの挨拶など電話を終えるやりとりが行われる部分であり、いずれも〈主要部〉の内容には直接かかわらない表現形式が現れる部分である。同様に、表 1 で示した昔話談話の基本構造における〈開始部〉と〈終了部〉も、〈主要部〉で語られる「話」の内容には直接かかわらない、発端句や結末句、開始・終了を表明するメタ的な叙述を、ここに位置づけることにする。したがって、友定 (1988) では「冒頭部」に含まれていた、発端句につづく部分（空間設定、人物設定の叙述部分）と状況説明部は〈主要部〉の〈導入〉に位置し、「結末部」に含まれていた「道徳的・教訓的意味をもった言葉」や「由来、形態などを説明するもの」、「事件の結末を述べるもの」は〈主要部〉の〈結末〉に位置するものとみなす。

4. 「方言ももたろう」の文末表現

昔話の定型性を特徴づけるものとして、〈主要部〉における出来事の叙述が、「～したとき」「～したそうな」「～したげな」のような過去形述語＋伝聞形式のくり返しによって展開するという点がある。また、各地の方言で語られた昔話資料をみると、「～したんだと」「～したんだっちゅうよ」「～したんじゃげな」のような過去形述語＋ノダ＋伝聞形式も多くみられる。

ここでは、こうした昔話の文末表現の地域差を俯瞰するために、「方言ももたろう」を資料とした調査を試みる。

「方言ももたろう」では、以下の 6 つの共通語文が、各地方言に訳出されている。

- ①むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさんがありました。
- ②おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へせんたくに行きました。
- ③おばあさんがせんたくをしていると、川上から大きなももがどんぶらこど

んぶらこと流れてきました。

④おばあさんはそのものをひろって家へ帰りました。

⑤おばあさんがももを切ろうとするとももがふたつにわれて、なかから大きな男の子が生まれました。

⑥おじいさんとおばあさんはその子に桃太郎という名前をつけました。

上記の6つの文の下線を付した述語部分に現れるノダ相当形式（ノダ、モノダ、コトダ、ワケダなどの説明のモダリティ形式）と伝聞形式の出現パターンを整理すると表2のようになる。ノダ相当形式を含む叙述は「説明型」、含まない叙述は「描写型」、伝聞形式を含む叙述は「伝聞型」、含まない叙述は「確定型」とし、それぞれの組み合わせによって、4つの叙述型「伝聞描写型」「伝聞説明型」「確定説明型」「確定描写型」を設定する。

表2 ノダ相当形式と伝聞形式の出現パターンの分類

	ノダ相当形式と伝聞形式の出現パターン	叙述型
タイプA	ノダ相当形式なし・伝聞形式あり	伝聞描写型
タイプB	ノダ相当形式あり・伝聞形式あり	伝聞説明型
タイプC	ノダ相当形式あり・伝聞形式なし	確定説明型
タイプD	ノダ相当形式なし・伝聞形式なし	確定描写型

各地の「方言もたろう」に現れた述語形式は表3にまとめ、また、表2で整理したノダ相当形式と伝聞形式の出現パターンの地理的分布を図1に示した。

図1によれば、伝聞描写型（タイプA）が東北・北陸・山陰・九州という日本列島の周辺部に分布し、伝聞説明型（タイプB）が東北南部から九州北部までの広がりをもち、確定説明型（タイプC）が東海・近畿・四国に現れる。確定描写型（タイプD）はまとまった分布領域をもたない（確定描写型（タイプD）には元の共通語文をほぼそのまま音読したものも含まれているため、ここでは地域的な語りの特性が表れたものとは見なさない）。

図1の分布を周囲分布とみなせば、昔話の語りにおいては、過去形述語と伝聞形式のみで語り進める伝聞描写型（タイプA）の叙述から、ノダ相当形式を用いた伝聞説明型（タイプB）や確定説明型（タイプC）の叙述が新しく発達してきたものと推定することができる。このことは、中央日本語史上において、「のだ」の発達が近世期以降の後発的なものであることから裏付けられるだろう（青木2011など）。

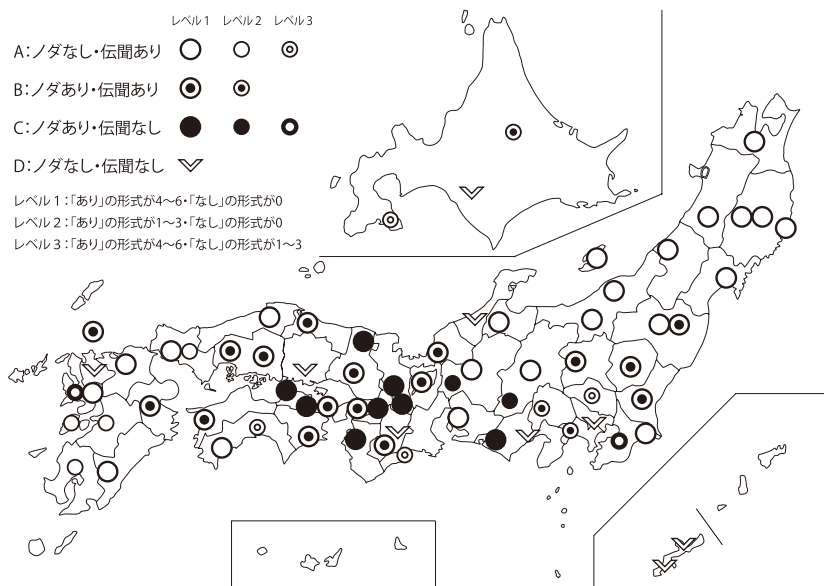


図1 「方言ももたらう」のノダ相当形式と伝聞形式の出現パターン

ただし、図1の分布は、ノダ相当形式の有無の地理的分布を示したものではない。国立国語研究所編『方言文法全国地図』(GAJ) 17図「行くのではないか」の準体形式(=「の」に相当する準体助詞・形式名詞類)の有無と形態のバリエーションの分布を見ると⁽²⁾、「その他・無回答」が一带に広がる琉球諸方言を除き、北海道から九州にかけての本土諸方言においては、準体形式+繫辞もしくは述語用言に直接繫辞が後接する形によって、ノダ相当の文末表現が構成されることがわかる。すなわち、少なくとも本土諸方言においては、全域的にノダ相当形式が存在しているといえる。

したがって、図1において、伝聞描写型(タイプA)が現れる地域は、ノダ相当形式をもっていながら、昔話の語りにおいては、それを使用しないで過去形述語と伝聞形式のみで語り進める叙述型を定着させているのに対し、伝聞説明型(タイプB)や確定説明型(タイプC)が現れる地域は、昔話の語りにおいて、ノダ相当形式を用いた叙述型を定着させているということになる。

ところで、〈主要部〉の叙述が伝聞描写型(タイプA)で展開する地域には、〈開始部〉と〈終了部〉に定型的な発端句・結末句をもつ地域が多い。定型的な発端句と結末句は、東北、北陸、山陰、四国の一部(高知など)、九州の一部(大分など)で採集された昔話資料に多く観察されるのである(柳田1943、稲田・稲田編2001参照)。

以下では、各地の方言で語られた昔話資料により、昔話の談話構造とそこに現れる文末表現を総合的に分析することにより、語りの定型性と叙述型の関係について考えたい。

5. 「読みがたりむかし話」資料にみる各地の昔話の談話構造と表現形式

ここでは、「読みがたりむかし話」資料から、各地の昔話談話を抽出し、分析を試みる。

昔話談話は全文を引用し、地の文の一文ごとに通し番号を付し、それぞれの文の談話構造上の位置づけを表 1 に示した昔話談話の基本構造にそって示す。地の文の言い切りの述語部分には下線を付し、また、ノダ相当形式は**太字**、伝聞形式は□を付して示す。

5. 1 伝聞描写型が多用される昔話談話

まず、伝聞描写型が多用される昔話談話の例を見てみる。(例 1) は岩手、(例 2) は島根の「読みがたりむかし話」資料に掲載されている例である。

(例 1) 「カッパのすもう」(『読みがたり岩手のむかし話』遠野市附馬牛町)

開始部	01むがすむがす、あった <u>ずもん</u> な。《発端句》
導入	02ある村におまつり <u>あった</u> ど。 03村の若者だちあ、すもう <u>とった</u> ど。
主要部 本題	〈展開 1〉 04すたば、どっからかふたりのわけえ男ではってきて、すもうさ<u>かだ</u>ったど。 05すたどころ、そのわけえ男、<u>強</u>かったど。 06相手をすぐにつき<u>出す</u>んだど。 07だれもかなわな<u>が</u>ったど。 〈展開 2〉 08すもうがおわってがら、村の若者だちあ、「あいつら、どこのもんだべ。」っていって、こっそり、ふたりのあと<u>つい</u>で<u>った</u>ど。 09すすたらば、ある橋の下さ、<u>はい</u>って<u>った</u>ど。 10そして、「人ってばかなもんだ。カッパずもんは、うででおす力あつえんだが、このうで引っぱられつと、かだらがぬげで、力ねくなるんだもん。」って<u>いった</u>ど。 11若者だちあ、「あいつらカッパか。ようし、うで引っぱればええんだな。ええご聞いてだ。」と、<u>思</u>ったど。 〈展開 3〉 12つぎの日も、すもう<u>あ</u>ったど。 13それで、その若者<u>出</u>たど。 14きのうの若い男も出て、すもう<u>と</u>ったど。 〈展開 4〉 15立ち上がるが早いか、カッパの両方のうで、「ぐれつ。」と、<u>引</u>っぱ<u>った</u>ど。 16そうしたどころあ、うであぬけて、だらつと<u>な</u>ったど。

	〈結末〉 17つぎにまた、もうひとりの男出た ^ず 。 18それもそうして、やつつけた ^ど 。
終了部	19どんどはれ。《結末句》

(例2) 「鳴きくらべ」(『読みがたり島根のむかし話』出雲地方・平田市小境町)

開始部	01とんとんむかしのことだった ^{げな} 。《発端句》
導入	02出雲の神さまで、たいへん鳥ずきのおかたがおらっしゃってのう。その神さまは、毎日のように、鳥を集めて飛びくらべをしたり、鳴きくらべをさせたりしちやらっしやった ^{げな} 。
主要部 本題	〈展開1〉 03ある時、その神さまが、「おまえたちの鳴きかたは、長いばかりでおもしろみがねえ。こんどは、だれがいちばん短い鳴き方するかくらべてみる。」といわれた ^{げな} 。 04そこで、どの鳥も、短い鳴き方のけいこしたげなが、そうかんたんに短く鳴かれんもんだけん、困ってしまった ^{げな} がの。
	〈展開2〉 05そげするうちに、鳴きくらべの日が来た ^{がの} 。 06たいそう集まるだろうと神さまは思っちよられたげなが、集まったのは、トンビとキジとサギだった ^{げな} 。
	〈展開3〉 07一ばん初めにキジだった ^{げな} 。 08キジは、「ケン。ケン。」と鳴いて、それでやめておけばよかったに、「バータ、バタ。」と、はねをバタバタさせたもんだから、これも鳴き声に聞こえた ^{げな} 。
	〈展開4〉 09二ばんめのトンビは、目をギョロギョロさせて、「ビーン。ヒョロ、ヒョロ、ヒョロ。」と鳴いたもんだから、キジより長かった ^{げな} 。
	〈展開5〉 10おしまいのサギは、足をビーンとのばいて、「ギャー。」とひと声鳴いてやめた ^{げな} 。 11神さまは、「おまえがいちばん短い。おまえがいちばんだ。」と、ほめられた ^{げな} 。 12だどものう、あんまりええ声ではなかった ^{げな、ど} 。
	〈結末〉 13サギの頭のうしろの方に、ビーンとしたひげがあるのは、いちばんになった ^{しょうこだど} 。
終了部	14こっぱし。《結末句》

(例1)(例2)とも、過去形述語+伝聞形式のくり返しにより、出来事を時系列にそって淡々と連ねる談話展開となっている。

そうした淡々と連ねる叙述の流れの中で、(例1)の06のノダの使用が注目される。この文は、単に出来事を描写したものではなく、先行文の05の内容を補足説明するものである。語り手が「その若い男の強さ」を説明するために挿入した一文であり、ここでのノダは出来事の描写モードから語り手による説明モードに移ったことを伝える働きを担っている。

(例 2) においては、04の「困ってしまったげながの」、05の「鳴きくらべの日が来たがの」の「がの」が注目される。この「がの」は終助詞であり、共通語の「よね」にも似た、聞き手に注意喚起を促す表現機能をもつ。ここでは、出来事の描写モードから聞き手への注意喚起モードへの転換を終助詞が担っている。

さらに(例 2)では、12と13の伝聞形式「と」の使用が注目される。(例 2)で用いられている伝聞形式は、01～11が「げな」単独であるのに対し、12は「げな」に「と」を後接し、13は「と」単独で締めくくられている。12・13の2文は、時系列的に展開する出来事を述べたものではない。12は「サギの鳴き声に対する評価」を述べたものであり、13は「サギのピーンとしたひげの由来」を述べたものである。それまで出来事の叙述を淡々と連ねてきた「げな」に代わって、「と」を用いることでこの2文を際立たせ、〈結末〉に向かう談話展開を印象づけているといえる。

こうした観点に立てば、(例 1)の17で伝聞形式として「ず(<という)」が使用されているのも、それまで「と」で淡々と語り進められてきた叙述を、〈結末〉に差ししかかったところで「ず」に代えて、クライマックス感を印象づける効果があるとみることでもできよう。

5.2 伝聞説明型が多用される昔話談話

次に、伝聞説明型が多用される昔話談話の例を見てみる。(例 3)は群馬の「読みがたりむかし話」資料に掲載されている例である。

(例 3)「カッパの話」(『読みがたり群馬のむかし話』吾妻郡吾妻町)

開始部 (なし)	
主要部	導入 01カッパは、川のふちに住んでいて、 <u>人をつかまえると、しりの穴から手をいれて、はらわただけつかみだして食うんだと</u> 。 02そして、死げえは、そのまんま川に <u>流してやるんだと</u> 。 03もし、ふわふわ流れていく水におぼれて死んだ人を見たら、それはカッパのしわざに <u>まちげえねえ</u> 。 04カッパは水の中だと百人力だが、おかにあがるとからっきし力が <u>ねえ</u> 。
	本題 〈展開 1〉 05あるとき、ようつりが川に <u>行ったんだと</u> 。 06あらしのあとで、川原には、木の根や材木なんかが <u>うちあげられていたんだと</u> 。 〈展開 2〉 07ようつりが、川原の石にこしかけて休んでいると、水の中から一匹きのクモがこのこはい出してきて、細い糸をようつりの足に <u>ひっかけてたんだと</u> 。 08ようつりは、カッパが化けているかも知れねえと思って、気味わりいから、その糸をはずして、そばの大きな木の株に <u>ひっかけてたんだと</u> 。 09そうすると、またクモが出てきて、足に糸をひっかけてたんで、また木の株に <u>ひっかけてたんだと</u> 。

主要部	本題	〈展開3〉 10少しすると、ずるずると大きな音がして、目の前のでっかい木の株が、ぐらぐらとゆれながら、川の中にひきこまれていったんだと。 11ようつりは、さっきの糸をはずしておかなかったら、と思って、ひやあせがでできたそうだと。 12そして、あのクモは、やっぱりカッパにちげえねえと思ったんだと。 〈結末〉 13川でクモを見たら、カッパかも知んねえから気をつけるんだな。
	終了部	(なし)

(例3)では、〈本題〉の出来事の叙述が、過去形述語＋ノダ＋伝聞形式のくり返しによって展開している。一見、淡々とした語り口調にもみえるが、〈導入〉と〈結末〉の語り口調の印象は、〈展開〉部分とはかなり異なる。すなわち、〈導入〉の01、02の述語部分は、非過去形＋ノダ＋伝聞形式の形をとって、これから〈本題〉で語られるカッパについて、メタ的に説明するものになっており、続く03、04も同様に、カッパについての話し手の見解や知識を提示するものになっている。〈結末〉の13も、非過去形述語＋ノダ＋終助詞「な」の形で、聞き手に注意喚起を促すものとなっている。

(例3)の〈導入〉部分と〈結末〉部分は、話者が「個人を抑えた一般的な語り手」としてではなく「話者個人」として発話している印象を受ける。ノダが話し手による出来事相互の関連づけを表す説明のモダリティ形式であることをふまえると、昔話の語りにおいてノダによる説明型の叙述が定着しているということは、こうした「個人的発話」への切り替えを容易に引き起こすことにつながっているものとみられる。

5.3 確定説明型が多用される昔話談話

最後に、確定説明型が多用される昔話談話の例を見てみる。(例4)は大阪の「読みがたりむかし話」資料に掲載されている例である。

(例4)「カモの恩返し」(『読みがたり大阪のむかし話』大阪市)

開始部		(なし)
主要部	導入	01びんぼうで子だくさんの男がいやはった。 02年のくれがそこまできてるちゅうのに、正月のもちがつかれへん。 03つきとうても、金がないからどもならんや。 04子どもは子どもでひもじゅうて、「ワイワイ。」いうし、かみさんはかみさんで、朝からばんまで、「正月のもちい、どないすんねん。」いうて、白目をむきよる。 05男はこらえこらえして、ひとことももの言わんと、よそさまの正月でつだいにせい出したったんやな。

主要部 本題	〈展開 1〉
	06 <u>大みそかのこっチャ。</u>
	07 やっといただいたなけなしのお金をもって、男は、もち米を買いに行 <u>った</u> 。
	08 とちゅうに池があつて、そのそばまでくると、カモがあみに <u>にかかつ</u> とるやないか。
	09 カモは、羽をバタバタさして、目になみだを <u>うかべ</u> とる。
	10 男はかわいそうにな <u>ったんや</u> なあ。
	11 あみをはっていた者に、金をやって、カモを <u>にがしたり</u> よ <u>った</u> 。
	12 ほんで、とうとう、もち米は買われんようにな <u>ってしも</u> た。
	〈展開 2〉
	13 正月の朝と <u>な</u> った。
	14 目をさましてみておどろいたの <u>なんの</u> 。
	15 庭にはな、もち米がところせましと <u>ば</u> か <u>しに</u> 積まれと <u>ったんや</u> 。
	16 カモがむくいてくれたちゅうて、それはそれは、ひょうばんにな <u>った</u> <u>ちゅう</u> <u>ねん</u> 。
	〈結末〉
	17 それからや、男に運がむいてきてきて、大阪一の金持ちにな <u>った</u> <u>ちゅう</u> <u>こっチャ</u> 。
	終了部 18 ええことは、 <u>しとかん</u> ならん <u>もんや</u> なあ。《メタ叙述》

(例 4) の述語部分は、以下のようにバラエティに富んでいる。

- (a1) 過去形述語単独：01・07・11・12・13
- (a2) 過去形述語＋ンヤ（＋終助詞）：05・10・15
- (a3) 過去形述語＋伝聞形式＋ネン：16
- (a4) 過去形述語＋伝聞形式＋コッチャ：17
- (a5) 過去形述語＋ノナンノ：14
- (b1) 非過去形述語単独：02・04・06・09
- (b2) 非過去形述語＋ンヤ：03
- (b3) 非過去形述語＋ヤナイカ：08
- (b4) 非過去形述語＋モンヤ＋終助詞：18

これらの文末表現で語りが展開する(例 4)の全般的な印象は、話者が「個人を抑えた一般的な語り手」としてではなく「話者個人」として出来事を伝えようとしている、というものであろう。(a1) (b1) のような述語単独の文は、出来事の描写に臨場感を与えており、(a2) (a3) (a4) (b2) (b4) のンヤ・ネン・コッチャ・モンヤの使用は、話者の事態把握を述べる説明モードの語りを印象づけ、(a5) の「目をさましてみておどろいたのなんの」や (b3) の「カモがあみににかかつとるやないか」からは、話者の事態に対する評価が伝わってくる。特に、終盤の 15 「積まれとったんや」、16 「ひょうばんになったちゅうねん」、17 「大阪一の金持ちになったちゅうこっチャ」、18 「ええことは、しとかんならんもんやなあ」にみられる説明のモダリティ形式の連鎖は、談話展開上のクライマックス感の演出として、十分な効果を発揮していると感じる。

話者自身が体験した出来事をノダ文の連鎖で語るの、エピソード・トークの

特徴だろう。昔話は、本来は話者自身が個人的に体験した出来事を語るものではないため、伝聞形式を伴わないノダ文の連鎖で語ることに違和感が生じかねないが、日常的なエピソード・トークの延長に昔話の語りが位置づけられている地域では、(例4)のような伝聞形式を伴わない確定説明型の叙述が、昔話の語りにおいても採用されるものとみられる。

6. おわりに

方言で語られる昔話を談話の一形態としてみたとき、そこには「語りの型」の地域性というものを見出すことができる。

形式句（発端句・結末句）の使用や、伝聞描写型（過去形述語＋伝聞形式）の叙述のくり返しなど、これまで典型的な昔話の特徴とみられてきたものは、実は、東北・北陸・山陰など、特定の地域に定着している「語りの型」に現れる表現形式であると言える。実際にこれらの地域では、これまでも典型的な昔話の採集量が多く、それらを語る「昔話らしい語り口調」というものが、地域内において、連綿と伝承・共有されてきているものと思われる。そして、1で示したように、これらの地域においては、昔話と伝説・世間話とでは「語りの型」が異なる、という共通理解がある。すなわち、昔話の語りと日常のエピソード・トークとは、「語りの型」のうえで区別されている。

一方で、関東から近畿にかけての都市部とその近隣地域では、そもそも典型的な昔話の採集量が少なく、昔話専用の形式句の発達も認められない。こうした地域で、昔話がノダ文の連鎖によって語られるということは、昔話に固有の「語りの型」というものが、地域内で共有されていないということを意味するだろう。昔話に固有の「語りの型」が存在しなければ、日常のエピソード・トークの延長で昔話を語ることになる。それがノダ文を連ねる叙述型となって現れているものと考えられる。

そのように考えると、確定説明型（過去形述語＋ノダ相当形式）を多用する地域は、昔話の語りと日常のエピソード・トークとをまったく区別しない「語りの型」をもち、伝聞説明型（過去形述語＋ノダ相当形式＋伝聞形式）を多用する地域は、典型的な昔話と日常的なエピソード・トークの語り口調を共存させた「語りの型」を定着させている、ということになる。伝聞描写型は日本列島の「周辺部」において定着しており、確定説明型は「中心部（都市部）」で多用される。そして、その両者の特徴をもつ伝聞説明型が、「周辺」と「中心」の中間的な位置に現れるというところから、「語りの型」の地理的分布は、日本の地域社会の地理的連続性を反映したものであることがわかるのである。

注

- (1) 発端句と結末句については、『日本昔話ハンドブック新版』に、次のように説明されている。
「昔話が語り出される発端の決まり文句である発端句には、「むかし」「むかしむかし」のほかに、「なんと昔があったげな」や「昔あったとさ」などがあり、話の締めくくりとなる結末句には、「どっとはらい」「いちごさかえた」「しゃみしゃっきり」「昔こっぶり」などがある。地方ごとに特色があり、その基本部分は語り手個人が恣意的に変更することはなかった。発端句によって聞き手を虚構の世界に引きこみ、結末句によって再び現実の世界に連れ戻すという機能を持っており、これらの形式句が昔話の形式性や虚構性を生んでいるといえる。」(稲田浩二・稲田和子編『日本昔話ハンドブック新版』: 240)
- (2) 『方言文法全国地図』には「のだ」の言い切り用法の項目が含まれていないため、「行くのではないか」の分布図によって、ノダ相当形式の分布を確認する。分布図(略図)は日高(2017)に掲載しているので参照されたい。

引用文献

- 青木博史 (2011) 「述部における名詞節の構造と変化」 青木博史編『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版
- 稲田浩二・稲田和子編 (2001) 『日本昔話ハンドブック』三省堂
- 国立国語研究所編 (1989) 『方言文法全国地図1』大蔵省印刷局
- 友定賢治 (1988) 「民話の表現と児童文学の表現」『表現学大系 各論篇23 民話の表現』教育出版センター
- 日高水穂 (2013a) 「「昔語り」に現れる文末表現の地理的分布」熊谷康雄編『大規模方言データの多角的分析 成果報告書—言語地図と方言談話資料—』国立国語研究所
- 日高水穂 (2013b) 「昔話の「語りの型」の地域差—文末表現を中心に—」『日本語学会2013年度春季大会研究発表会予稿集』
- 日高水穂 (2017) 「認識的条件文の地理的変異の類型」有田節子編『日本語条件文の諸相 地理的変異と歴史の変遷』くろしお出版
- 柳田国男 (1943) 「昔話の発端と結び」『昔話覚書』三省堂(『定本柳田国男集6』筑摩書房(1968年刊行)所収)

資料(提示順)

- 佐藤亮一監修 (2007) 『ポブラディア情報館 方言』ポブラ社
- 杉藤美代子監修・著『CD-ROM方言もたろう』富士通BSC
- 岩手県小学校国語教育研究会編 (2004) 『読みがたり岩手のむかし話』日本標準
- 島根県国語教育研究会編 (2005) 『読みがたり島根のむかし話』日本標準
- 群馬県ばなし研究会編 (2005) 『読みがたり群馬のむかし話』日本標準
- 大阪府小学校国語教育研究会・「大阪のむかし話」編集委員会 (2005) 『読みがたり大阪のむかし話』日本標準

付記

本稿の一部(1・4章)は、日高(2013a・2013b)で報告した内容に加筆・修正したものである。本稿は、JSPS 科研費26244024、16H01933、17K02801の助成を受けている。